万博記念公園春景色

須藤 健一（すどう けんいち）

プロフィール
1946年新潟県佐渡市生まれ。2009年より国立民族学博物館長。埼玉大学卒業、東京都立大学大学院社会科学研究科単位修得退学。文学博士。75年より民博助手・助教授を経て、93年神戸大学国際文化学部教授。同大学附属図書館長。専門はオセアニアの社会人類学、著書に『母系社会の構造』（紀伊国屋書店）、『性の民族誌』（人文書院）、『オセアニアの人類学』（風響社）など。第16回澁澤賞受賞。

すべての展示場が四〇年ぶりに生まれかわる。二〇〇八年から進めてきた新構築が三月のアイヌ家屋の屋根の葺き替えで完了する。

私が館長に就任したころ、「万博公園冬景色」という新聞の社説を目にした。本館と公園の施設を訪れる人影のまばらさを嘆き、その発展を鼓舞した記事であった。たしかに、開館時六〇万の入館者数が四分の一にまで落ちこんだ。

本館の展示は教員の研究成果の公開の場である。新構築はその成果を先鋭的に表現して本館の活性化をねらっている。主コンセプトは三つ。まず、文化の担い手である現地の人たち、展示する教員、そして来館者の三者が意見を出し合う、フォーラム型展示である。二つめはグローバル化の影響を各地の人びとが伝統文化に接ぎ木して新しい文化を創造する動きに注目する、グローカル展示である。三つめが、世界各地の文化と日本文化とのかかわりの展示である。このコンセプトは、新展示に生かされており、入館者にも「みんぱくは生まれかわった」と好評である。

新構築は展示だけでは終わらない。モノが生まれた社会・文化的背景を入館者に知ってもらうことが重要。展示のあと、現地から民族芸能チームやモノつくりの専門家などを招いて実演してもらい、入館者に「生きた文化」との接触をすすめている。この新展示や関連イベントの展開により、小中高校生をはじめ一般の入館者が二十数万人と大幅に増えている。

近年、世界の民族学博物館のなかには、民族誌展示から美術展示へ志向するところがある。本館の展示の使命は、衣食住から、美術・芸能、儀礼・宗教とその歴史変化をもふくめての総体的な演示にある。一方、フランスのケ・ブランリ美術館や大英博物館は、文化人類学者よりも美術史家の眼をひく仮面や彫像などを民族資料から選別して展示する傾向が強い。

両館が所蔵・展示している諸民族の仮面や彫像と同種の資料のほとんどを本館も収蔵している。三年前、東京の国立新美術館と主催した「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」でその一端を紹介した。私は入館者が生活用具であるモノを見て対話し、ときにはさわり、モノのふるさとの人びとの暮らしや文化を心に描いてほしいと思っている。ある基準で選ばれた「美術品」だけの展示は、「イメージの力」展のように美術館と博物館とが連携する特別展示としておこなえばよい。

エキスポシティの出現で賑わう万博記念公園とともに、新構築で生まれかわったみんぱくのさらなる発展を期待する。

月刊 みんぱく
3月号目次

1 エッセイ　千字文
万博記念公園春景色
須藤 健一

特集　ビーズ――つなぐ・かざる・みせる

2 世界はビーズでつながっている
池谷 和信

4 インダス文明とカーネリアン・ロード
遠藤 仁

5 古代日本とユーラシアをむすぶガラスビーズ
田村 朋美

6 北米先住民のビーズ装飾
――ヤマアラシのとげからガラスビーズへ
齋藤 玲子

7 台湾原住民族の多様なビーズ
野林 厚志

8 オセアニアの貝ビーズ――ソロモン諸島の貝貨を例に
後藤 明

9 ケニアの牧畜民サンブルのガラスビーズ
――母から娘へと受け継がれる恋人からの贈り物
中村 香子

10 〇〇してみました世界のフィールド
中国の鉄道の今むかし
塚田 誠之

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
雑煮
石毛 直道

16 文化遺産おもてうら
危機にさらされる世界遺産
――登録三〇年が経過したクスコの今
八木 百合子

18 手芸考
頑張りすぎない手芸
野田 涼美

20 ながなんぢゃ
おしりふき
菊澤 律子

21 次号予告・編集後記